

<臨床>口腔顔面領域の軟組織に生じた良性腫瘍の臨床統計

著者名(日)	高橋, 勝雄/和田, 重人/古田, 勲
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	19
号	2
ページ	187-192
発行年	2000-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00008544/

〔臨床〕

口腔顔面領域の軟組織に生じた良性腫瘍の臨床統計

高橋 勝雄, 和田 重人, 古田 勲

富山医科薬科大学医学部歯科口腔外科学講座

(主任：古田 勲教授)

Clinicostatistical analysis of benign tumors arising in the soft tissue of the oral and facial regions

Masao TAKAHASHI, Shigehito WADA and Isao FURUTA

Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Faculty of Medicine,
Toyama Medical and Pharmaceutical University

(Chief : Prof. Isao FURUTA)

Abstract

Seventy-eight cases of benign tumors derived from the soft tissue of the oral and facial regions were analyzed clinically. The results were as follows.

- 1) The tumors were classified as hemangioma (28.2%), pleomorphic adenoma (24.4%), fibroma (17.9%) and papilloma (14.1%). The remaining 15.4% consisted of 3 cases of lipoma, 3 of adenolymphoma, and other rare cases.
- 2) Of the 78 cases, 28 were in males and 50 in females (sex ratio) (1 : 1.8).
- 3) The patient ages at the first visit ranged from 5 to 80 years (mean age) (47.9 years).
- 4) Approximately three quarters (75%) had swelling as the chief complaints.
- 5) The primary sites was 22 cases (28.2%) in the tongue, 15 (19.2%) in the palate, and 12 (15.4%) in the lip. Hemangiomas and pleomorphic adenomas are more common in the tongue or lip and in the palate respectively.
- 6) The average long diameter of pleomorphic adenomas and papillomas were 32.9mm and 7.1mm respectively. These values deviated from the 19.6mm average for all cases.

Key words : benign tumor, clinicostatistics, soft tissue, oral and facial region.

受付：平成12年9月18日

緒 言

口腔顔面領域の軟組織に発生する良性腫瘍(以下, 軟組織良性腫瘍と略す)は, 様々な臨床病態を呈することから, その最終診断は組織学的診断にゆだねられることが多い。しかしながら, 個々の組織型における特徴的な臨床病態は少なからず存在し, それらを把握することはより適切な診断および処置を行う上で重要なことと考えられる。今回われわれは, 軟組織良性腫瘍について臨床統計を行い, 若干の知見を得たのでその概要を報告する。

対象および方法

対象症例は, 1988年1月から1997年12月までの10年間に富山医科薬科大学医学部附属病院歯科口腔外科を受診し, 病理組織学的に軟組織良性腫瘍と診断された78例である。これらの症例において, 組織型, 性, 初発時推定年齢, 初診時年齢, 病悩期間, 主訴, 発生部位および腫瘍長径について検討した。なお, 診療記録が不十分な症例, 病理組織学的に確定診断の得られなかった症例, および顎骨周辺性の歯源性腫瘍は対象から除外した。また病変が複数部位に進展する症例は, 主たる病変部をその発生部位として分類した。

結 果

1. 性, 組織型 (表1)

組織型別頻度は, 血管腫が22例(28.2%)と最も多く, 次いで多形性腺腫が19例(24.4%), 線維腫が14例(17.9%), 乳頭腫が11例(14.1%)であった。少数例として脂肪腫(線維性脂肪腫1例を含む)および腺リンパ腫が各3例(3.8%), 神経線維腫, リンパ管腫および顆粒細胞腫が各2例(2.6%)認められた。全体の性別頻度は, 男性28例(35.9%), 女性50例(64.1%)であり, 男女比は1:1.8と女性に好発する傾向

が認められた。中でも血管腫は, 男性7例, 女性15例, 男女比1:2.1と女性での高い好発傾向が認められた。

表1 性

組織型	男性	女性	計 (%)	男女比
血管腫	7	15	22 (28.2)	1 : 2.1
多形性腺腫	8	11	19 (24.4)	1 : 1.4
線維腫	5	9	14 (17.9)	1 : 1.8
乳頭腫	4	7	11 (14.1)	1 : 1.8
脂肪腫	0	3	3 (3.8)	女性のみ
腺リンパ腫	2	1	3 (3.8)	1 : 0.5
神経線維腫	0	2	2 (2.6)	女性のみ
リンパ管腫	1	1	2 (2.6)	1 : 1
顆粒細胞腫	1	1	2 (2.6)	1 : 1
計 (%)	28 (35.9)	50 (64.1)	78 (100.0)	1 : 1.8

2. 初発時推定年齢 (表2)

初発時推定年齢は, 78例中61例(78.2%)が20~60歳代に分布しており, 中でも30歳代が14例(17.9%)と最も多かった。また初発時推定年齢の平均は, 全体で43.4歳であった。

表2 初発時推定年齢

組織型	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	平均年齢	計 (%)
血管腫	3	2	1	2	3	3	2	6	0	44.8	22 (28.2)
多形性腺腫	0	1	5	4	2	1	5	0	1	42.7	19 (24.4)
線維腫	0	0	4	5	1	3	1	0	0	37.9	14 (17.9)
乳頭腫	0	0	1	2	3	2	2	1	0	48.6	11 (14.1)
脂肪腫	0	0	0	0	1	1	1	0	0	56.7	3 (3.8)
腺リンパ腫	0	0	0	1	0	1	0	1	0	52.3	3 (3.8)
神経線維腫	1	0	0	0	1	0	0	0	0	20.0	2 (2.6)
リンパ管腫	1	0	0	0	0	0	1	0	0	33.5	2 (2.6)
顆粒細胞腫	0	0	2	0	0	0	0	0	0	25.0	2 (2.6)
計 (%)	5 (6.4)	3 (3.8)	13 (16.7)	14 (17.9)	11 (14.1)	11 (14.1)	12 (15.4)	8 (10.3)	1 (1.3)	43.4	78 (100.0)

3. 初診時年齢 (表3)

初診時年齢は, 78例中73例(93.6%)が20~70歳代に分布しており, 中でも30歳代が16例(20.5%)と最も多かった。また初診時平均年齢は, 全体で47.9歳であった。これに対して組織型別の平均年齢は, 血管腫で55.5歳とやや高く, 線維腫で42.7歳とやや低い傾向が認められた。

表3 初診時年齢

組織型	初診時年齢										平均年齢	計 (%)
	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89			
血管腫	0	1	3	3	2	5	1	7	0	55.5	22 (28.2)	
多形性腺腫	0	1	3	6	2	1	4	1	1	45.1	19 (24.4)	
線維腫	0	0	4	3	2	3	2	0	0	42.7	14 (17.9)	
乳頭腫	0	0	1	2	3	2	2	1	0	48.6	11 (14.1)	
脂肪腫	0	0	0	0	1	0	2	0	0	57.7	3 (3.8)	
腺リンパ腫	0	0	0	1	0	0	1	1	0	56.3	3 (3.8)	
神経線維腫	0	1	0	0	1	0	0	0	0	33.0	2 (2.6)	
リンパ管腫	1	0	0	0	0	0	1	0	0	34.5	2 (2.6)	
顆粒細胞腫	0	0	1	1	0	0	0	0	0	27.0	2 (2.6)	
計 (%)	1 (1.3)	3 (3.8)	12 (15.4)	16 (20.5)	11 (14.1)	11 (14.1)	13 (16.7)	10 (12.8)	1 (1.3)	47.9	78 (100.0)	

4. 病悩期間 (表4)

病悩期間は、3ヵ月未満の症例が34例 (43.6%)と多く、10年以上の症例も7例 (9%)と少なからず認められた。組織型別の病悩期間は、血管腫で22例中、3ヵ月未満の症例が14例 (63.6%)、10年以上の症例が5例 (22.7%)と、特徴的な2峰性の分布を呈していた。一方、乳頭腫の病悩期間は、全例が1年未満であった。

表4 病悩期間

組織型	病悩期間							計 (%)
	1ヶ月未満	3ヶ月未満	半年未満	1年未満	5年未満	10年未満	10年以上	
血管腫	6	8	0	0	2	1	5	22 (28.2)
多形性腺腫	3	2	2	3	6	3	0	19 (24.4)
線維腫	4	0	1	0	6	2	1	14 (17.9)
乳頭腫	6	2	1	2	0	0	0	11 (14.1)
脂肪腫	1	0	0	1	0	1	0	3 (3.8)
腺リンパ腫	0	1	0	0	1	1	0	3 (3.8)
神経線維腫	0	0	0	0	0	1	1	2 (2.6)
リンパ管腫	1	0	0	0	1	0	0	2 (2.6)
顆粒細胞腫	0	0	0	1	1	0	0	2 (2.6)
計 (%)	21 (26.9)	13 (16.7)	4 (5.1)	7 (9.0)	17 (21.8)	9 (11.5)	7 (9.0)	78 (100.0)

5. 主訴 (表5)

主訴は腫脹、腫瘍形成が60例 (76.9%)と最も多く、次いで精査依頼9例 (11.6%)、出血4例 (5.1%)であった。その他として疼痛、違和感、発赤、開口障害、潰瘍形成が各1例認められた。なお出血4例は、すべて血管腫であった。

表5 主訴

主訴	症例数 (%)
腫脹・腫瘍	60 (76.9)
精査依頼	9 (11.6)
出血	4 (5.1)
その他	5 (6.4)
計 (%)	78 (100.0)

疼痛、発赤、違和感、開口障害、潰瘍形成：各1例

6. 発生部位 (表6)

発生部位は、舌が22例 (28.2%)で最も多く、次いで口蓋が15例 (19.2%)、口唇が12例 (15.4%)、頬粘膜および耳下腺が各8例 (10.3%)、歯肉が5例 (6.6%)、顎下腺が3例 (3.8%)、頸部が2例 (2.6%)であった。また口底、頬部、鼻部が各1例であった。組織型別の発生部位は、血管腫で22例中、舌が9例 (40.9%)、口唇が7例 (31.8%)であった。また多形性腺腫19例中、大唾液腺では耳下腺が6例 (31.6%)、顎下腺が3例 (15.8%)であり、小唾液腺では口蓋が9例 (47.4%)であった。

表6 部位

組織型	部位										計 (%)
	舌	口蓋	口唇	頬粘膜	耳下腺	歯肉	顎下腺	頸部	その他		
血管腫	9	1	7	2	0	0	0	1	2	22 (28.2)	
多形性腺腫	0	9	1	0	6	0	3	0	0	19 (24.4)	
線維腫	5	1	2	4	0	1	0	1	0	14 (17.9)	
乳頭腫	3	4	0	1	0	2	0	0	1	11 (14.1)	
脂肪腫	1	0	0	1	0	1	0	0	0	3 (3.8)	
腺リンパ腫	0	0	1	0	2	0	0	0	0	3 (3.8)	
神経線維腫	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2 (2.6)	
リンパ管腫	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2 (2.6)	
顆粒細胞腫	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2 (2.6)	
計 (%)	22 (28.2)	15 (19.2)	12 (15.4)	8 (10.3)	8 (10.3)	5 (6.4)	3 (3.8)	2 (2.6)	3 (3.8)	78 (100.0)	

7. 腫瘍長径 (表7)

腫瘍長径は、78例中58例 (74.4%)が20mm未満の比較的小さな症例であったが、50mmを超える大きな症例も5例 (6.4%)に認められた。また平均腫瘍長径は、全体で19.6mmであった。これに対して組織型別の平均腫瘍長径は、多形性腺腫で32.9mm、腺リンパ腫で32.0mmとやや大きく、乳頭腫で7.1mmと小さくなる傾向が認められた。

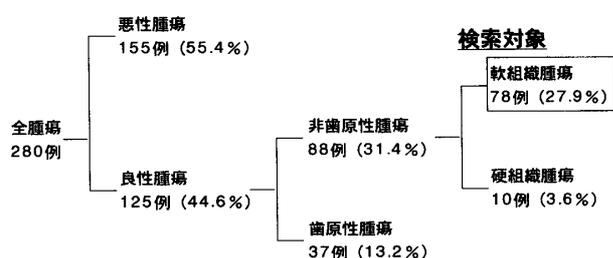
表7 腫瘍長径

組織型	腫瘍長径 (mm)								平均	計 (%)
	0-5	10	20	30	40	50	60	60-		
血管腫	1	12	5	1	1	1	0	1	20.1	22 (28.2)
多形性腺腫	0	1	7	2	3	3	2	1	32.9	19 (24.4)
線維腫	6	2	4	1	0	0	0	1	13.7	14 (17.9)
乳頭腫	5	4	2	0	0	0	0	0	7.1	11 (14.1)
脂肪腫	1	1	1	0	0	0	0	0	8.3	3 (3.8)
腺リンパ腫	0	0	1	0	0	2	0	0	32.0	3 (3.8)
神経線維腫	0	1	0	0	1	0	0	0	22.5	2 (2.6)
リンパ管腫	2	0	0	0	0	0	0	0	5.0	2 (2.6)
顆粒細胞腫	0	2	0	0	0	0	0	0	8.5	2 (2.6)
計 (%)	15 (19.2)	23 (29.5)	20 (25.7)	4 (5.1)	5 (6.4)	6 (7.7)	2 (2.6)	3 (3.8)	19.6	78 (100.0)

考 察

一般に口腔顔面領域における良性腫瘍は臨床的に硬組織と軟組織が発生由来であるものに大別されている。両者の鑑別は視診、触診およびX線写真所見により容易と考えられ、実際の臨床において硬組織あるいは軟組織に腫瘍性病変が認められた場合には、それぞれの組織における好発疾患や臨床病態を念頭に置きながら、適切な診断および処置を進める必要があると考えられる。また良性腫瘍の臨床統計は多くの施設から報告されているが、それらのほとんどは組織型や発生由来が限定された報告¹⁻⁹⁾であり、軟組織全体を対象とした臨床統計の報告¹⁰⁾はきわめて少ない。当科における軟組織良性腫瘍の位置付けを表8に示した。本研究の観察期間内に当科で取り扱った口腔顔面領域の全腫瘍は280例であり、その内訳は、良性腫瘍が125例(44.6%)、悪性腫瘍が155例(55.4%)であった。さらに良性腫瘍は顎骨周辺性を含む歯原性腫瘍37例(13.2%)と非歯原性腫瘍88例(31.4%)

表8 当科における軟組織良性腫瘍の位置付け



に分類され、非歯原性腫から顎骨原発性腫瘍を除いた軟組織良性腫瘍78例(27.9%)が本検討の対象となった。軟組織良性腫瘍は、症例数が悪性腫瘍の約半数かつ歯原性腫瘍の約2倍であるという事実を踏まえると、日常の口腔外科診療において比較的可成りな疾患と考えられる。

本検討における全体の男女比は1:1.8と、口腔領域の全良性腫瘍を対象とした報告における1:1.2¹¹⁾、1:1.6¹²⁾と比べて、女性での好発傾向がやや高かった。この結果は、一般に男性にやや好発^{13,14)}するとされる歯原性腫瘍が、今回の検索対象から除外されたことが一因として考えられた。血管腫は、男性に多いとする報告¹⁰⁾も認められるが、女性に多いとする報告^{1-3,12)}が圧倒的に多く、当科でも22例中15例(男女比1:2.1)が女性であった。多形性腺腫、線維腫および乳頭腫は、ほとんどの報告において女性に多い^{5-7,10,12)}とされており、当科でも多形性腺腫19例中11例(男女比1:1.4)、線維腫14例中9例(男女比1:1.8)、乳頭腫11例中7例(男女比1:1.8)が女性であった。また、脂肪腫に関して、岡本ら⁹⁾は文献的考察から144例中82例(男女比1:0.76)が男性であり、その好発を指摘している。この報告に相反して当科では小数例ながら、脂肪腫3例すべてが女性症例であった。また顆粒細胞腫は女性での好発¹⁵⁾とされているが、当科での2例も女性症例であった。

初発時推定年代別例数に関して、柴田ら¹⁰⁾は10歳未満と30歳代に、国芳ら¹²⁾は10歳代と30歳代に二峰性のピークが認められることを指摘している。当科では30歳代~60歳代に症例の分散する傾向を認め、20歳未満の若年者症例は全体の10.2%と少なく、前述のピークは認められなかった。平均初発時年齢は、柴田ら¹⁰⁾の36.2歳、国芳ら¹²⁾の34.3歳と比較して、当科では43.4歳とやや高い傾向が認められた。また平均初診時年齢においても、柴田ら¹⁰⁾の40.9歳、国芳ら¹²⁾の38.0歳と比較して、当科では47.9歳とやや高い

傾向が認められた。これらの結果は、本来若年者に好発¹⁻³⁾する血管腫症例が比較的少ない、また高齢者における多形性腺腫症例が比較的多いという、当科の特徴的な症例分布が関与しているものと推察された。

一般に良性腫瘍の病悩期間は、発育が緩慢で、激痛や機能障害などの日常生活における支障が少ないため、発見時に早期に来院されるものと、長期間放置されるものに大別される。当科でも病悩期間が3ヶ月未満のものが78例中34例(43.6%)と短期間の症例が多い反面、5年以上のものが78例中16例(20.5%)に認められ、良性腫瘍における特徴的な病悩期間を反映しているものと考えられた。血管腫は、従来の報告^{2,3,10,12)}と同様に当科においても短期症例と長期症例とに完全に二分化する傾向があり、病悩期間が3ヶ月以上1年未満の症例は皆無であった。乳頭腫に関して、作田ら⁸⁾は11例中5例の病悩期間が3ヶ月未満であったと報告している。当科では11例全例が1年未満であり、その内6例(54.5%)が1ヶ月以内であった。これらの結果は著明な外向性発育を呈し、小さくとも腫瘤として自覚されやすい本腫瘍の生物学的特徴を反映しているものと考えられた。

主訴は、従来の報告^{1-3,5,6,10,12)}と同様に、当科においても78例中60例が腫脹・腫瘤で占められていた。精査依頼の9例はいずれも歯科的治療において偶然発見された腫脹・腫瘤であり血管腫1例、多形性腺腫3例、線維腫1例、乳頭腫2例、脂肪腫1例、神経線維腫1例であった。また、出血の4例は全例が血管腫であり全例とも外科的に処置していた。

発生部位に関して、柴田ら¹⁰⁾は軟組織良性腫瘍115例において、その好発を舌27.3%、頬粘膜18.0%、口蓋15.6%、口唇14.1%と報告している。同様に当科でも舌28.2%、口蓋19.2%、口唇15.4%、頬粘膜10.3%であり、この4部位で症例全体の73.1%と大多数を占めていた。血管

腫は、従来の報告^{1-3,10,12)}では舌、頬粘膜、口唇が好発部位とされているが、当科では22例中舌9例、口唇7例と相対して頬粘膜は2例と少なかった。また口腔外科領域で取り扱われる多形性腺腫の発生部位別比率は口蓋：耳下腺：顎下腺で100：24～91：12～31^{4-7,12)}と報告されているが、当科における同比率は100：67：33とほぼ同様の結果であった。またリンパ管腫と顆粒細胞腫の各2例は、いずれも好発部位である舌に発生していた。

腫瘍長径に関して、柴田ら¹⁰⁾は軟組織良性腫瘍115例において20mm未満の症例が全体の76.2%を占めていたと報告している。当科でも20mm未満の症例は74.4%とほぼ同様の結果であった。多形性腺腫は、20～30mm程度の大きが多い^{5,6,10,12)}と報告されているが、当科では19例中20mm未満が8例、50mm以上6例と双極性の分布を呈し、平均腫瘍長径は32.9mmと全体の平均値から大きく掛け離れていた。これらの結果は当科における耳下腺あるいは顎下腺症例に40mmを越える大きな症例含まれていたことが一因として挙げられる。また乳頭腫に関して、柴田ら¹⁰⁾は82.3%が、作田ら⁸⁾は82.8%が腫瘍長径10mm未満であったと報告している。当科でも81.8%が腫瘍長径10mm未満、かつ平均腫瘍長径7.1mmと特徴的な分布を呈していた。これらの結果にも、先に述べた乳頭腫の生物学的特徴が反映されているものと考えられた。

結 語

1988年1月から1997年12月までの10年間に於いて富山医科薬科大学医学部歯科口腔外科を受診した、口腔顔面領域の軟組織に発生した良性腫瘍患者78例について臨床統計的に検討した。

1) 男女比はほぼ1対1.79で女性に多く、病理組織分類別では、血管腫22例(28.2%)、多形性腺腫19例(24.4%)、線維腫14例(17.9%)、乳頭腫11例(14.1%)、脂肪腫、腺リンパ腫が

それぞれ3例(3.8%), 神経線維腫, リンパ管腫, 顆粒細胞腫がそれぞれ2例(2.6%)であった。

- 2) 初発時推定平均年齢は43.4歳, 初診時平均年齢は47.9歳であった。
- 3) 主訴の約3/4が腫脹, 腫瘤形成であった。
- 4) 部位では, 舌が22例(28.2%)で最も多く, 次いで口蓋15例(19.2%), 口唇12例(15.4%), 頬粘膜, 耳下線がそれぞれ8例(10.3%)であった。
- 5) 大きさ別では, おおよそ3/4が20mm以下であった。

引用文献

1. 松村智弘, 菅原利夫, 他: 血管腫患者の統計的観察. 口科誌, **22**: 476-480, 1973.
2. 橋本賢二, 塩谷重利, 他: 最近10年間における血管腫の臨床統計的観察. 日口外誌, **23**: 62-70, 1977.
3. 藤宮克則, 向井 洋, 他: 当科における過去13年間の血管腫の臨床統計的観察. 日口外誌, **41**: 55-57, 1995.
4. 青木弘興, 柳沢繁孝, 他: 唾液腺疾患307例の臨床統計的研究. 日口外誌, **37**: 49-53, 1991.
5. 領家と男, 斉藤鉄郎, 他: 唾液腺腫瘍52例の臨床的検討. 日口外誌, **37**: 30-37, 1991.
6. 加藤幸弘, 市原秀記, 他: 当科における過去10年間の多形性腺腫の臨床統計学的検討. 口腫誌, **4**: 29-35, 1992.
7. 吉川文弘, 岩井聡一, 他: 多形性腺腫およびその悪性型(悪性多形性腺腫, 多形性腺腫内癌)の臨床的特徴の比較検討. 日口外誌, **42**: 54-56, 1996.
8. 作田正義, 中村 浩, 他: 口腔内に発生した乳頭腫の臨床的・病理組織学的検討. 日口外誌, **29**: 59-65, 1983.
9. 岡本圭一郎, 和田 健, 他: 口腔の脂肪腫の臨床病理学的検討 —過去10年間の当科症例と文献的考察—. 日口外誌, **42**: 26-32, 1996.
10. 柴田隆夫, 水野明夫, 他: 口腔外科領域の軟組織良性腫瘍の臨床統計的検討. 口科誌, **35**: 164-170, 1986.
11. 河原裕憲, 佐久間早苗, 他: 生検および手術材料の病理組織学的診断に関する統計的観察. 東北歯大誌, **10**: 17-23, 1983.
12. 国芳秀晴, 吉田雅司, 他: 当科における過去10年間(1976年~1985年)の良性腫瘍の臨床統計的観察. 日口外誌, **35**: 152-164, 1989.
13. 朱 恩新, 方 静, 他: 歯源性腫瘍の臨床統計. 歯科ジャーナル, **37**: 555-560, 1993.
14. 笠原和恵, 小林一三, 他: 歯源性腫瘍の臨床的検討. 日口科誌, **43**: 661-671, 1994.
15. 重松久夫, 藤田訓也, 他: 舌に発生した顆粒細胞腫の組織化学的, 電顕的検討. 日口外誌, **37**: 2006-2014, 1991.